

第二十二回 玄和全国競書大会優秀作品



市川 清子

審査所感

第二十二回競書大会の審査が十一月二十八日、時折和気藹々とした和やかな空気も持たせつつも厳正なる審査が行われた。

学生部の古典臨書は、毎年多く見られていたが、今年は一一般部条幅作品にも今まで以上の古典臨書作品が多く見られ、与えられたお手本の臨書に留まらず、精益求精の姿勢が感じられたことは嬉しい限りである。まだ消化しきれていないと感じる作品もあったが、数年後の作品が本当に楽しみである。

一般部作品は、半紙作品も条幅作品も、相変わらず安定した仕上がりを見せ、玄和の底力を見るようであった。ただ、毎年気にかけていることであるが、過ぎたデフォルメによる文字の構成は残念ながら今年も多少見受けられた。揮毫したご本人は読めているのだろうが、誰が見ても読める範囲のデフォルメにして頂きたい。文字を使ったデザインを描くのではなく、文字そのものの文化を大切にして頂きたい。『書』は『書く』であり、決して『描く』ではない。

調和体作品、仮名作品も高いレベルでの作品が多く、就中、調和体作品では仮名的調和体作

— 玄和書道会賞 —



鷹松 昂暉(高三)



陳 知松



出井 絢菜(小三)



網倉ゆうか(小五)



公野 珠月(中三)

品も見られ、仮名作品では古筆調の仮名作品から現代調の仮名作品までと、益々の出品作品の幅の広さが感じられた。

さて、教育部半紙作品でもかなり高いレベルでの佳作が目立ったが、残念なことに本文と比べると名前があまりにお粗末なものがあり、名前と本文を別人が書いたかのように違い過ぎる作品もあった。相当地に手厚い指導のもと、あれだけ素晴らしい作品を書かせておられるのなら、名前まで徹底してご指導頂ければと思う。

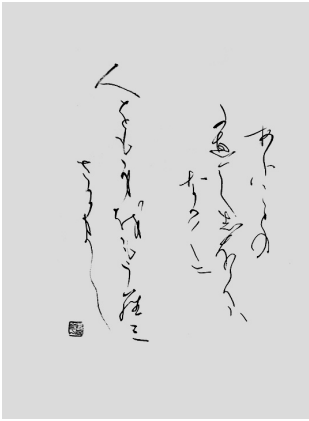
幸子先生が他界されてしまった。唯々悲しいことである。悔しいことである。言葉も出ない。しかし春浦調に幸子先生の感性と技術を加えた幸子調の作品は、この競書大会の出品作品群では赫々たるが如く生きていた。ご社中の方は、幸子先生から受けたご指導の一つ一つを忘れずに、そして藍から青になって頂くことを願って止まない。弟子に自分が越されることを嬉しく思わない師はいない。

日漢書、泰山之巔穿石。挺住！挺住！

第二十二回 玄和全国競書大会

審査委員長 西 墨濤

— 春 浦 賞 —



奥田 楓華



山地 史乃(高二)



工藤 奈々



山口 歳子



奥 理紗(小一)



鈴木 快維(小六)



青木 里桜(中二)



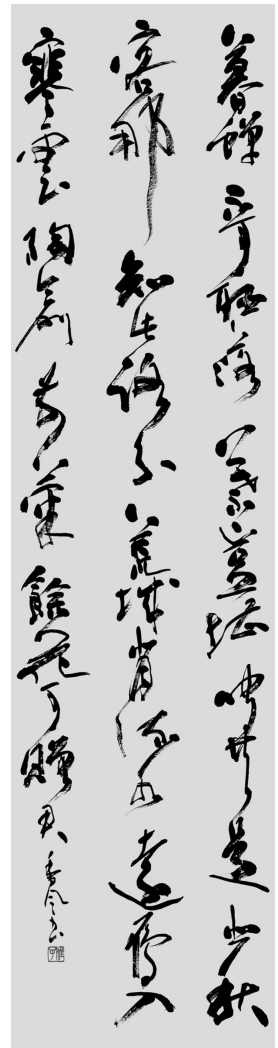
徳留 遥照



鈴江梨乃子(高一)



近藤 風光



白戸 香風



森本 絢音(小二)



戸倉 凜(小四)



田村 昌太(中一)